

1. 音楽科における未来そぞう

本校研究総論における「未来を『そぞう』する子ども」とは、「どんな状況においても、共によりよい未来をそぞう（想像・創造）しようと、「主体的実践力」「協働的実践力」「創造的実践力」を發揮し、様々な視点で、自分、集団、社会・自然などに対して、あきらめずにアプローチをし続けることができる子ども¹⁾である。つまり、本研究において「未来そぞう」とは、自らが置かれた状況にかかわらず、他者とともによりよい未来をつくらうと、対象に対してアプローチし続けていくということである。

この「未来そぞう」を「音楽科における未来そぞう」として捉え直すと、「他者とともによりよい〈表現〉をしようと、音や音楽にアプローチし続けていく」ということになる。本校音楽科では、この「音楽科における未来そぞう」を実現すべく、研究を進めていく。

(1)めざす子ども像 「よりよい〈表現〉をそぞうする子ども」

先述した「音楽科における未来そぞう」を実現するために、めざす子ども像を「よりよい〈表現〉をそぞうする子ども」と設定する。本論において表現を〈表現〉としているのは、本校音楽科が表現を「生成の原理」に基づく表現、つまり「活動を通して子どもの内側と外側に二重の変化をもたらす営み²⁾である」という立場をとっていることから、単なる活動形態としての表現と区別するためである。「生成の原理」については後で詳しく述べる。

本校音楽科がいう「よりよい〈表現〉をそぞうする子ども」とは、自分のもったイメージを音や音楽を通して演奏したり、批評文を書いたりして表すときに、演奏方法を工夫したり批評文に使用する言葉や文章を工夫したりして、そのイメージがより詳しく豊かに伝わるようにする子どもの姿を指している。音楽活動において自分のイメージを表すという目的に対して、その子自身がより納得し満足のいく演奏や批評文となるように〈表現〉する姿をめざすということである。

(2)「生成の原理」と未来そぞう

本校音楽科ではこれまでに「生成の原理」をもとに授業研究を積み重ねてきた。これまでの研究をふまえると、この「生成の原理」による音楽授業によって「音楽科における未来そぞう」を具現化できると考える。

「生成の原理」とは、「(人間と環境との)相互作用を通して環境側に変化が起こり、そのことで人間側にも変化が起こるといふ、この環境側と人間側との二重の変化が意味をもつとする³⁾ (括弧内筆者)」という相互作用の構造のことである。これを音楽科の学習に適用すると、子どもが自らの内なる考えやイメージをもとに環境としての音や音楽という対象に働きかけて試してみればその結果を受け止め、新たに考えやイメージをつくりかえるということになる。

これを、《つばさをください》を教材とした表現領域（歌唱）の実践を例に挙げて述べる。次の①～④は子どもの活動の流れである。《つばさをください》という歌は、前半は静かでおだやかな感じの旋律、後半は躍動感のあるリズムで盛り上がり、広がりのある感じの旋律が特徴である。

- ① 《つばさをください》を聴いて「後半は、自由になってつばさを大きく広げる感じがする。」と捉え、「その『自由になってつばさを大きく広げる感じ』を表すために声を大きくして歌ってみ

よやかな。」などと考える。

- ② ①の考えをもとに実際に声を大きくして歌ってみる。
- ③ 声を大きくした演奏が「自由になってつばさを大きく広げる感じ」を表せているかどうか考えながらふりかえる。すると、「もっとだんだんつばさを広げる感じにしたいから、前半と後半の境目の伸ばすところをだんだん大きくしながら歌ってみよう。」など新たに考えやイメージがつくりかえられていく。
- ④ 「もっとだんだんつばさを広げる感じ」という新たなイメージや「前半と後半の境目の伸ばすところをだんだん大きくしながら歌う」という新たな考えをもとに実際に演奏する。

この下線部①～④のようなプロセスをたどりながら、音楽作品（鑑賞の場合は音楽の批評文）として完成に向かっていくのである。このプロセスを未来そうぞうにおける学びのプロセスでいうと、下線部①は「想像」、②は「創造」、③は「想像」、④は「創造」にあたる。つまり、「生成の原理」による音楽授業では「想像」と「創造」がそれぞれの質を高めながら何度もくり返され、子どもたちの〈表現〉がよりよい音楽作品や音楽の批評文をめざして進んでいくということになる。これは、未来そうぞうの学びのプロセス⁴⁾と共通していることから、「生成の原理」による音楽授業によって「音楽科における未来そうぞう」を具現化できるといえる。

(3) 音楽科と3つの実践力のかかわり

音楽科では、第1～2年次の研究をふまえ、音楽科において未来そうぞうの3つの実践力を発揮している姿は以下のようになると考えた。

表1. 音楽科において未来そうぞうの3つの実践力を発揮している姿

主体的実践力…自ら音や音楽にかかわっていきこうとしている姿
協働的実践力…音楽活動にかかわる目的を共有し、その実現に向けて他者とかがわっている姿
創造的実践力…自らのイメージをもとに発想・構想している姿

では、「生成の原理」による音楽授業において3つの実践力はどのように発揮されるのだろうか。ここでは、3つの実践力の視点で1. (2)で挙げた「生成の原理」による音楽授業の例（下線部①～④）をみていく。

①では、子ども自身が《つばさをください》という楽曲を聴き、自分にとってどのように感じられるかを考えているので主体的実践力を発揮しているといえる。そして感じたことを表すための方法をアイデアとして出しているので創造的実践力も発揮しているといえる。このアイデアを出すときには、クラスやグループで意見交流する。したがって子どもたちは、自分とは違う他者の感じ方、そして感じたことを表すための方法として自分では思いつかなかったことにふれることができ、それをもとに感じ方が広がったり、新たな方法を思いついたりする。次の②では、実際に歌って試すので主体的実践力を発揮しているといえる。実際に歌うときには、「みんなで考えたアイデアがうまくいくかどうか確かめよう」というクラスもしくはグループでの共通の目的をもって歌う。そして③では、表したいイメージを表すことができているか考えながら音楽を聴くというところで主体的実践力を発揮し、新たに考えやイメージをつくりかえていくというところで創造的実践力を発揮しているといえる。ここでもクラスやグループで一緒にふりかえりを行う。そこでは自分たちのより納得する演奏となるように他者とともに、アイデアを出し合う。そして④でまた実際に歌って試すので主体的実践力を発揮しているといえる。ここでも「みんなで考えたアイデアがうまくいくかどうか確

かめよう」というクラスもしくはグループでの共通の目的をもって歌う。この①～④のプロセスは、個人の中だけで進むのではなく、クラスやグループの中で互いに考えたことや感じたことを出し合いながら進んでいくものである。①～④のどの場面においても協働的实践力を発揮しているといえる。

以上のことから、3つの実践力（資質・能力）の面からも、「生成の原理」による音楽授業によって「音楽科における未来そうぞう」を具現化できるといえる。

2. 音楽科における未来をそうぞうする子どもを育むための手立て

前項のように「生成の原理」による音楽授業のプロセスを3つの実践力の視点でみていくと、協働的实践力が発揮されているところで主体的実践力や創造的実践力も連動して発揮されているという構造がみえてきた。つまり、「生成の原理」による音楽授業を行う際に、協働的实践力が発揮されるようにすれば、主体的実践力や創造的実践力も連動して発揮され、3つの実践力を育成することができるのではないかと考えた。そこで、本年度は、次のような仮説を立てた。

仮説：協働的实践力が発揮されるようにすることで、主体的実践力と創造的実践力も連動して発揮される。

そして、この仮説のもと、これまでの研究成果もふまえながら、授業の中で協働的实践力が発揮されるようにする手立てを教材選択や教具の工夫の視点から考えながら授業実践を行ってきた。その中で有効だと考えられた手立てについて表2にまとめる。

表2. 協働的实践力が発揮されるようにするための手立て

	教材の選択	教具の工夫
手立て	<ul style="list-style-type: none"> ○イメージの自由度が高いもの ○子どもが自らの生活経験を生かすことができるもの ○他者とイメージを共有しやすいもの (例) わらべうた、地元の祭囃子、一弦箱 	<ul style="list-style-type: none"> ○意見を可視化し共有できるもの (例) 付箋, 拡大ワークシート, ホワイトボードなど
理由	<ul style="list-style-type: none"> ○自由に出されたイメージは、その子どもの生活経験に基づいている。 ○生活経験に基づいたイメージは他者と共有しやすい。 ○イメージの共有は、目的の共有につながる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○付箋 個々人が考えた意見を埋もれさせることなく他者に対して提案できる。 ○拡大ワークシート, ホワイトボード 話し合いながら書いていくためコミュニケーションが起こるきっかけになり、且つ、発想や構想を共有しながらグループのメンバーとともに〈表現〉を推進していくことができる。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ○わらべうたや地元の祭囃子などの日本伝統音楽だけでなく、それ以外の教材開発も行うこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ○子どもたちの思考を止めてしまいかねない。 ○コミュニケーションが言葉だけのものになり、音や音楽を通した関わり合いが少なくなる。 →各授業において「どの手立て」を、「何のために」、「いつ」、「どのように」取り入れるのが適しているのかを検討する。

以上のことをふまえて実践を行ってきた中で、協働的实践力が発揮されることが主体的实践力と創造的実践力の発揮につながることをみえてきた。ただし、これは協働的実践力の発揮が起点というわけではないということもみえてきた。協働的実践力の発揮は、個々人の発揮している主体的实践力や創造的実践力をさらに発展させることにつながるということである。今後はこのこともふまえながら、授業を構成し実践を行っていく。

注

- 1) 平成 30 年度大阪教育大学附属平野小学校研究総論, p.1
- 2) 同上書, pp.5-6
- 3) 小島律子(2015)『音楽科 授業の理論と実践 生成の原理による授業の展開』あいり出版, p.4
- 4) 平成 30 年度大阪教育大学附属平野小学校研究総論, p.2